掲示板

研究会・研修会等への報告者・講師の派遣

（平成7年11月～平成8年3月）

○第四回酪農畜産研究交流会・研究報告（話題提供）
主　催　酪農畜産研究交流会
とき　平成7年11月16日
テーマ　①「豊富町酪農経営の展開とパターン」
②「音別町農業振興公社の展開方向」
報告者　①河村　彰仁（当研究所・専任研究員）
②井上　誠司（当研究所・専任研究員）

○低コスト稲作実践モデル事業・報告会
主　催　ホクレン農業協同組合連合会
とき　平成7年11月22日
テーマ　「低コスト稲作実践モデル事業報告会」コーディネーター
対応者　冨田　義昭（当研究所・常務理事）

○96年新春時局講演会
主　催　（社）北海道生活協同組合連合会
とき　平成8年1月9日
テーマ　「北海道農業の現状と課題」
講演者　七戸　長生（当研究所・所長）

○ホクレン技術担当者レベルアップ研修会
主　催　ホクレン農業協同組合連合会
とき　平成8年1月23日
テーマ　「農協における営農指導の現状と課題」
講演者　河村　彰仁（当研究所・専任研究員）

○野菜に関する講習会
主　催　富良野農協
とき　平成8年1月26日
テーマ　「野菜生産および流通の現状と将来展望」
講演者　冨田　義昭（当研究所・常務理事）

○日高町農業こん談会
主　催　日高町
とき　平成8年1月29日
テーマ　「農業の新しい時代を迎えて、日高町農業の発展方策を探る」
講演者　冨田　義昭（当研究所・常務理事）

○農業講演会
主　催　今金町・桧山北部地域の関係機関共催
とき　平成8年2月2日
テーマ　「これからの農業経営の戦略は」―北海道野菜の位置づけと今後の展望―
講演者　冨田　義昭（当研究所・常務理事）
なお、講演会後引き続き今金町農業委員会・農協・土地改良区合同役員懇談会が併催され、「複合経営の取り組みと今後の具体策について」意見交換が行われ、助言をした。

○北海道農業普及学会・第一回研究大会
主　催　北海道農業普及学会
とき　平成8年2月3日
テーマ　「技術指導と経営指導の狭間」
講演者　七戸　長生（当研究所・所長）

○名寄地域農業セミナー
主　催　名寄市
とき　平成8年2月6日
テーマ　「複合経営の展開方向について」
講演者　西村　直樹（道立中央農業試験場・経営部経営科　研究員）

○農業農村整備関係技術係長研修会
主　催　北海道農政部
とき　平成8年2月6日
テーマ　「国際化に対応した北海道農業の方向」
講演者　七戸　長生（当研究所・所長）

○第11回広島町土づくり大会・記念講演
主　催　広島町土づくり推進協議会
とき　平成8年2月7日
テーマ　「北海道における野菜の生産・流通の現状と将来展望」
講演者　冨田　義昭（当研究所・常務理事）

○第12回畑地かんがい研究会・基調講演
主　催　網走開発建設部
とき　平成8年2月8日
テーマ　「畑作地域における高収益作物の導入方策と課題」―野菜の生産・流通の現状と将来展望―
講演者　冨田　義昭（当研究所・常務理事）

○青森県地域農業ゼミナール
主　催　青森県
とき　平成8年2月16日
テーマ　「地域農業をこれからどう活性化させるのか」
講演者　七戸　長生（当研究所・所長）

○21世紀型農業・農村研修会
主　催　名寄市・風連町並びに両町土地改良区
とき　平成8年2月20日
テーマ　①「21世紀に向けた農業と農地流動化、集団化について」
②「消費者から見た農業とこれからの農業に期待するもの」
講演者　①塩沢　照俊（北海道拓殖短期大学・教授）
②田端　弘子（コープさっぽろ生活文化研究所・所長）

○喜茂別町農業推進大会
主　催　喜茂別町
とき　平成8年2月23日
テーマ　「今日の農業、明日の農村」
講演者　七戸　長生（当研究所・所長）

○地域農業研究所・研修会
主　催　北海道地域農業研究所
とき　平成8年3月1日
テーマ　「農業発展方策と地域振興」
講演・報告者　①基調講演　長尾　正克（道立中央農業試験場・経営部長）
②基調報告　幸　健一郎（当研究所・研究部長）
③現地からの報告Ⅰ　矢代　和則（厚沢部町農協・管理部長）
④現地からの報告Ⅱ　柳本　力（白糠町農協・生産部長）

○平成七年度北海道農業試験研究推進会議・農村計画部会・重点検討の話題提供

主　催　北海道農業試験場
とき　平成8年3月5日
テーマ　「北海道における野菜の生産・流通の現状と将来展望」―稲作・畑作の複合経営の定着と産地形成・発展をめざして―
報告者　冨田　義昭（当研究所・常務理事）

編集後記

◆一九九六年の年明けから、札樽地区では気象台始まって以来という大雪に見舞われました。連日の豪雪報道に接していると、現実に臨場感を伴っていたこともあり、この地域だけ割りを食ったような被害者意識にかられていました。その後、寒波と大雪は全国におよび、さらには世界各地でも同様の気候が随所に現れている、といった報道に接すると、何となく仲間が増えてきたような気分になっていました。

世界経済の模範生とも言えるドイツでさえ、失業率が十一％を超えたと知らされ〝同病相憐れむ〟気分になったことと合わせ下衆の愚かさとでも言えましょうか。

◇当研究所は設立満五周年を迎えました。本号は、一月二十二日に開催した記念シンポジウムを特集に編みましたが、当日は予定を上回る多数のみなさんが全道各地から参加されました。

さて、当研究所の今日に繋がるルーツとして、昭和四十七年に設立された「北海道農協問題懇話会」があります。同懇話会の設立十五周年記念誌（昭和六十一年十一月発刊）の序文で、記念事業実行委員会・委員長の佐伯利彦氏（当時の洞爺村農協組合長）は、「今こそ本音が語られる研究会を」と題して、以下のことを述べられています。

――思えば懇話会が設立された昭和四十七年は、政府が「減反政策」を打ち出したことによって北海道農業にかげりが見えはじめ、農協運営にとっても将来の方向を見定めるのに暗中模索という状態でした。懇話会初代会長であった橋場正一さんは、「この困難なときこそ、農協運動の原点に立ち返って農民の立場から農協運動を見つめ直すことが重要である」と懇話会活動を位置づけました。――本会の研究会への取り組みの姿勢は、常に現場を中心とすることでした。その具体的な現れとして現地調査の実施、現地研究会の開催などを通して現場の農家の「生の声」を聞きとり、通常研究会で真剣な討議を重ね、それぞれの問題で時代に即した提言を行って参りました。

――ときあたかも、十五年を経た今は、再び新たな「水田利用再編対策」が打ち出されようとしておりますし、海外からの農産物の貿易自由化問題、そして財界や労働界すらからも農業批判が出されるなど、まさに農業は四面楚歌という状態にあります。このような時であるからこそ、本懇話会のようなユニークな研究会が現場から〝本物〟を探り出すことが如何に大切であるかを信じて疑いません。――

◆作家の司馬遼太郎さんが二月十二日逝かれました。その前日の、北海道新聞、「ほん」欄で新刊紹介が掲載された直後でしたから、愛読者の一人としては些かショックを受けました。その随筆集『春灯雑記』（朝日文芸文庫・二月一日発刊）のうち『踏み出しますか』の後段部分で、司馬さんは日本の文明を歴史経過と跡付けし、かつアメリカのそれと対峙させたうえで、次のように語っています。

――アメリカ文明の特徴の一つは、経済におけるOpen doorであると思います。第二次大戦後、極東政策の用語としての門戸開放主義は歴史のファイルに入りましたが、開放的な市場経済は、アメリカの基本姿勢となりました。つまりは、あたらしい文明の基準になりました。このアメリカの基本姿勢もしくは本質は、農業と製造業において世界に卓越している、という条件においてのみ成立するものです。その二点で、アメリカは十分に自信がありました。――さて文明の基準のなかに、自由と人権、それにやや声を小さくして市場開放ということを入れてもいいでしょう。市場ということには、労働市場も入ります。千数百年、自然的な閉鎖国家であった日本の場合、つらいですね。私など、どうもひるむおもいがします。日本がまだまだ外国人労働者に対しオープンに迎え入れるということにはなっていないことに、私（ひそ）かなよろこびを感じます。しかし、これは文明のにない手としては、十全ではありません。私はそういうあたりを百も知りつつ、こっそりよろこんでいるのです。しかも将来に不安を覚えつつです。――

◇これらの論述に対する見解の持ち方は、読者それぞれのものであろうと思います。それであればこそ、本誌にあっても読者諸氏の見解を引き出す思考への小さな導入口の一つにはなりたいと、不遜にも思っています。　K・T

DATA FILE

関連事項／DATA

日本女子大学
〒112東京都文京区目白台2-8-1
☎03-3943-3131

北海道農業ジャーナリストの会
〒060札幌市中央区北3条西7丁目
（北海道農業会議内）
☎011-281-6761

北海道農協青年部協議会
〒060札幌市中央区北4条西1丁目
（北海道農業協同組合中央会内）
☎011-231-2111

生活協同組合市民生協コープさっぽろ
〒060札幌市中央区北4条西11丁目13
☎011-271-7711

酪農学園大学
〒060江別市文京台緑町582-1
☎011-386-1112

メロンファームうえむら
〒071-01旭川市西神楽南16号3-102
☎0166-75-3505

札幌大学経済学部
〒062札幌市豊平区西岡3条7丁目
☎011-852-1181

北海道立中央農業試験場
〒069-13夕張郡長沼町東6線北15号
☎01238-9-2001